

341

著教善田前 視應警 視警

特244

297

國民ライブラリー

物資總動員の

根本精神



3

0024041-000

特244-297

物資總動員の根本精神

前田善教・著

日本学術普及会

昭和12

ADD

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年5月... 付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

入會規定

- 一、本會ハ日本學術普及會ト稱ス
- 二、本會ハ廣ク知識ヲ世界ニ求メ國體精神ニ立脚セル日本精神文化ヲ中外ニ宣揚スルコトニ努メ以テ無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉ラシコトヲ期ス
- 三、右使命遂行ノタメ専ラ言論文章ニヨリ國民大衆ノ協力ヲ得テ素志ノ貫徹ヲ圖ル
- 四、本會ノ趣旨目的ニ賛成シ入會セントスル者ハ左ノ規定ニ據ルベシ
 - (イ)會員ハ入會費トシテ金五拾錢ヲ納付スルコト
 - (ロ)會員ハ會費トシテ年額金貳圓五拾錢(半ケ年分金壹圓五拾錢)納入ノコト
- 五、本會々員ニハ毎月二回國民ライブラリーヲ頒ツモノトス
- 六、本會ハ會員ニ對シテ出版圖書購入ノ利便ヲ計リ且ツ専門學術出版ノ相談ニ應ジ又本會講演會ニハ自由出席ノ特權ヲ有ス
- 七、本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一名
 - 理事 若干名
 本會々務ハ會長及理事ノ合議ヲ以テ執行ス 以上

日本學術普及會

東京市小石川區上宮坂町一九
電話小石川(5)三九九一

特 244
297

物資總動員の根本精神

前 田 善 教



緒 言

過去世より現在へ、現在より未來へ、三世に亘る時間と空間とに於て、たへず人類が叫んでゐるものは何か？

宇宙の絶対理法を探索する哲學も、衆生を濟度する宗教も、事々物々、個々の現象ついて眞相を究明せんとする科學も、要は精神と物質とに關する問題を捉へて眞善美化することにある。之を措いて他に論すべき何ものもない、これを閉却して依存すべき何ものもない、精神と物質とは



鳥の兩翼の如く車の兩輪の如く、常に相即不離の關係に於て、兩々相俟つて宇宙を構成し、三世に輪廻し、十方に遍滿して、無始より以來人類は最靈としてこの二法を提げて文化向上の一路を辿りつゝ無終への進行を續けてゐるのである。

一、人類發展の根據

若し假りに宇宙に精神なければ如何にぞや、そこに宗教もなければ、教育もなく、政治もなければ、經濟も無い、競争もなければ鬭争も無い、雀が藪の中に於て惡事を働いたものに對して團體の統制上から制裁を加へることも、蟻が手を空ふして巢に歸る働蟻を追ひ返すことも、それ等の社會に於ける精神作用であつて、これが無かつたならば、團體としての生存生活は恐らく期待出来なくなる況や人類社會に於て精神の内容——知情意即ち智仁勇と云ふものが缺如してゐたならば、一體其の當位が顯現することは斷じて無かつたに相違ない。

今から五十二萬三千年の太古から直立して歩く様に進化した人類は、手を自由に而も器用に動かし得ることが出来、先づ干戈を執つて利害相反するもの、種族或は團體を脅威するものを討伐

した、そうして弱肉強食、自然淘汰の理法は必然に人間と云ふ適者を生存せしめた。そうして發見に發見を加へ、立派な現代文化を招來することが出来たのである、然しながら、一途に精神界方面のみを見て物質界の存在を輕視し、唯識諸法とか、心外無別法とか、唯心史觀とかを高唱してゐる向のあることは甚だ遺憾とせざるを得ない。又同時に人間は他の動物と同じ様に、未開の時代に於ては食餌のある處にしか密集しなかつた、アラビアの沙漠や、アフリカの沙漠や、支那の沙漠には決して人類棲息の痕跡は認められてゐない、人類の生棲に必須要件たる五行（木火土金水）の存する處、而もそれが豊富なる處にしか地質學者の鋤鉞は打ちこまれないのはそれが爲である。

人類が斯くして食餌のある處に集まり、段々種族集團の生活が營まれる様になつて、食物を自然の供給から受くるのみにては不足を生じ、こゝに耕耘と云ふことが發明され、それから物々交換に移行し、更に河川を利用し、或は牛馬を利用して、有無相通の經濟的事由となり、更に今日の交通、通信機關、或は通貨の發明を見て、陸地より大洋へと、世界の隅々まで通商貿易が行はれてゐるのである。

斯く人類社會を觀察するならば、物質によつてのみ今日の文化を招來したもので、恐らく精神の加はる點は一として見當らない、皆物が、物に依つて發展進化し、向上進歩して今日の世界を造り上げたのではないが、更に未來と雖も物質が、凡て吾人々類の歴史の頁を殖やして行くのであつて、精神など眼にも見えず、耳にも聞へず影も形も無い、架空のものが、どふして、斯の尊貴すべき重要な役目を爲し遂げられるものでは無い、物質なればこそ、これまでに人類を進化せしめたのであると、と叫び、斯かる觀點から人類の文化的發展の歴史を唯物史觀と命名して其の偏狹な考を固く執つて動かさないのも亦少しとしない。

一、人はパンのみにて生きるものではない

世界の動き、人類の動きを凡て物質的にのみ或は精神的にのみ觀るのはよろしくない、けれども恐らく誰でもが、斯かる一方的な偏見を以て、世界を見、人類を見ることが、妥當であり、正見であり、正思惟であるとは思ふものはあるまい。物質と云ひ、精神と云ひ、それは紙の表裏を二様に見たことであつて、實質は一枚の紙に通ぎないのである、精神を離れて物質無く、物質を

離れて精神は無いのである、物心一如である、一如の物心を二様に見ることは、現象を研究する爲の便利であるが、一如を二以上に區別して、一方的偏見に囚はれることは、誤謬に陥り、正しい理解を以て、物事を判断し得ない斷見に墮することになる。故に吾人が人間と生れ出て、人間らしき行藏云爲をなす爲には、斯の物心一如、二而不二の理法を體得して、人生に何ものかを貢獻者與して次の子孫に引繼かなくてはならぬと思ふのである。従つて私の述ぶる處の「物質總動員の根本精神」も、歸する處、二而不二なりとの見地に立つて論ずるものであることを承知して貰いたいのである。

一、行爲に映る民族性

日本人を太陽から離して見てはならない、太陽は日本の別名で、飽まで太陽と云ふ觀念が、臣民に生理化してゐたからで日本を今日まで築き上げたのも恐らくこの太陽精神の凝り固まつたものであると謂ひたい。何事も「なせばなるなさねばならぬ何事も、ならぬは人のなさぬなりけり」

と云ふ努力奮闘が文化向上の成果を収むるに重要な条件でなければならぬ、無論努力と云ふことは無意識に流汗鍛錬さるべきでなく、時代の潮流、周囲の事情等を正視して、自己の希求する事業に勇往邁進することを意味することは贅言を要するまでもない。然しながら、そうした心的態度で如何に努力しても、その効果を期待することが出来ない場合が多い、例へば支那人は商賈として優秀な存在であることは世界的に有名である、のみならず、彼等の一舉手一投足は凡て商賈としての重要な技術的條件を體得してゐるのである。然るに彼等の思想は、彼等の國民として育てられた支那の國民性によつて、譚讓放伐、權謀術數の誤麻化しと偽瞞とによつて生活して來たために、商賈としての使命は何が。何の爲に生活を爲すか。と云ふ大理想が培養されてない、その存在としての價値は利己的以外に何ものもないと云ふ極めて空虚なることを看取し得ることが出来るのである。

例を支那に取つて論ぜねばならぬほどに、こうした例が日本にも皆無であると云ふ意味ではない、稀にこうした例は乏しからずであるが、然し日本に於ける商賈は一般的に、個人生活、社會生活、國家生活、國際生活と云ふ四態様の生活のあることを懸けながら知つて、其の商賈に努力

してゐることが認められるのである。外人から云ふならば我田引水論として貶されるかも知れないが、然し私のこうした論據は決して薄弱なものではない。それは如何に支那に失業者の多いことであるか、即ち己れの存在を知つて他の存在を知らない證據である、同胞相愛の心薄きもの集まれる國家相であることが如實に認めらるゝことの反證ではないか。

我が日本國は、物資に豊富ならずと雖も、一億の國民を包擁する我國に於て、その失業者は、あらゆる救濟機關によつて取扱はれてゐる數が僅かに五十萬と稱されてゐるではないか、同胞相愛、隣保相扶くるの太陽的精神が充實してゐなければ、此の如き事相は見らるゝものではない。然し、これは單に一例に過ぎない、例を歐米にとれば尙多いが今や日支事變によつて世界の神經は極めて最高の懸敏さを示してゐる際であるから、少しの刺激から一波萬波を生ずる様なことがあつてはならぬ故暫く控へて置くことにしたい。

一、太陽と大和民族

さて我が日本人が太古から育まれて來た、その太陽的精神が臣民に生理化せるため自己の生活

八
についても、上掲四種の生活あることを認め、物の輕重、價値の多少と云ふことの判断による善
用も殆んど誤まるることが少いのである。然らばその太陽精神とは何か、何を一體太陽精神と云ふ
のか、宇宙の一存在としての太陽に何の精神があるのか、これに架空の理論を牽強附會して太陽
精神など、高唱するは寔に一笑の價値も無いと科學者は嗤んで吐き出したがるかも知れない、
科學者は「悲しみの涙も、嬉しさの涙も、戀しさの涙も、恨みの涙も、口惜しさの涙も、涙とし
ては變りは無い、涙は水分と鹽分とより成り立つてゐる」としか云はないのである。太陽精神な
ど云つて見た處でそれは分らう筈がない。たゞ太陽と云ふものは太陽系と云ふものから成立し
て、その色は七色から成り、その熱度、光度は逆も高度であると云ふことだけしか科學は教へて
呉れない。固よりそれは眞なることで、決して間違つたことではない、然し日本人は、太陽につ
き、單にそれだけの理由で満足するものではない、何か太陽にはそうした科學的よりも、更に大
なる一つの信仰と云ふものを有つてゐるのである。而も斯かる信仰は未開の時代からの信仰では
あるが、他の物に對する或は神佛に對する信仰が、科學の力によつて段々と褪色して行くに反し
て、科學が分析化合して分類の札を貼つて呉れ、ば呉れる程、倍々吾人の太陽に對する信仰の深

度を加へて行くのは全く不思議とせねばならないのである。

それは太陽が吾人の先祖であつて、先祖を崇敬することが人間進化の唯一順正道であると云ふ
ことに基因してゐるからではなからうか、科學的に言つても太陽が動植物よりも先に宇宙間に存
在してゐたと云ふことは、動植物が太陽の光と熱とによらなければ生存し能はないと云ふことに
よつても明瞭である。今日の人類を思ひ、今日の文化を思ひ、今日の生存生活を思ふならば、誰
れ一人として太陽の大恩恵を思はざるものあらんやである。

我が大日本帝國は、國名が日の本の國である、日出る國である、而して伊勢の太神宮には天照
皇太神が神しづまります、天皇の御位を嗣がせらるゝ御位が天津日嗣であらせられ、日本の國旗
が日の丸の旗で、日本の國土で生れた大和民族の子は女が日女で、男が日子である、こうしたこ
とから我が國の歴史を通觀すると太陽に關する事柄が所在に散見してゐることが分る、聖德太子
が推古天皇の十五年に遣隋使小野妹子を遣はされた時に隋の煬帝への國書に、「日出る處の天子
書を日没する處の天子に致す恙なきや」と宣せられてゐることを瞻仰して吾人の心臓は異様な歡
喜に躍動することを覺ゆるではないか。

更に降つて源平の戦ひの時に、無官の太夫教盛が鐵葉黒々として、平家の御曹子然たる風格を容姿に現はして、須磨の濱邊で松籟飄々たる繪の様な景致の中、熊谷直實の手に懸つて、敢ない最期を遂げたことは、後世史家の涙を絞りつづけてゐるがそのとき、熊谷が前半に手挟んだ鐵扇は日の丸であつたことは、劇に、口碑に傳へられ、後世の教育資料と爲つてゐるではないか。

また、頼山陽が我が國と支那とを比較對照して吟した詩に「日出處日沒處兩頭天子皆天君……」とある、日出る我が國は天壤と窮り無き永遠無窮の、絶對無限の永劫を包蔵すると同時にその日の本の光りは十方に遍く、その大愛、大仁、大悲は三世を貫いて無盡莊嚴の輝かしさを示現してゐるのである。

而して我等臣民は太陽の光りが或は其の熱が、萬物を慈育して利すことなき萬徳圓滿の體と相と用とを具備してゐることを、轉てそれは我が民族の信仰の中心であらせらるゝ、皇室の象徴であると確信してゐるのである。随つて日の丸の旗の下、聯隊旗の下、海軍旗の下、たとへ如何なることがあつても、天皇陛下萬歳を高唱して、山櫻の如く深く散り行くことを無上の光榮として

ゐるのである。

斯の如きは大和民族以外の民衆の理想し能はざる處のものである。忠臣蔵の芝居を見た一外人が、一日本人を捉へて「大石以下の者らは、あれだけの行動をするには幾千の金を貰ひしか」と問はれ其の答に困つたこと、同様に、外人には日本人の生理化された心的態度は決して分るものではない。

一、世界三大聖人の住む所

太陽が國名であつて、其の徳を攝取し歸一し給ふ、一天萬乘の聖天子を絶對信仰の中心として球心的に、たゞ一筋に誠の道を踏んで集まる我等臣民は、永遠に何と云ふ幸福な存在だらう！我等が日常生活の上に遭遇する處の艱難についても、我等が決してそれに負けないで、それを止揚的契機として、捨劣得勝の成果を得るのも、矢張り、斯の抜き難き「日本人」なりとの自覺がある爲ではないか。我等の先祖に盡忠報國の赤誠——天に二日なし——の火にも焼けない、水にも溺れない、確固不動の信念があつたればこそ、今日の様に世界的文化の糧を攝取し、更に固有

獨得の日本精神を發揮して世界に光被せんとの偉大なる天業に邁進することが出来たのではないか、我等は民族的誇張を徒らにするものではない、我等が、斯く叫び得ることに就ての資格は、客觀的に已に價值づけられてゐるのであつて白髮三千丈といひ、萬里の長城と誇る出鱈目の大法螺ではないのであつて、歴とした實在に立つて、これを絶叫し得るのである、看よ！ 活眼を開いてよく看よ、以下事實が雄辯に物語つて居るではないか。

即ち印度の摩河佗國に生れて廿九歳の齡に、皇太子の榮位を捨て、愛妻を捨て、愛子を捨て、謂ゆる、慾望を捨て、雪山に登り、或は谿谷原野を辿り、難行苦行すること六ヶ年、終に尼連禪河の滯りで成道せられ、五十年の説法で衆生を濟度された聖教釋迦牟尼世尊は、今何處にゐられるか、印度には其の教法が無い、その歩まれた聖跡には雜草生ひ茂りて遊子の涙を誘ふてゐるに過ぎないとは何たる幻滅の悲哀ぞ！

然しながら釋尊の不滅の靈魂は世界の何處にも彷彿ふてゐない、唯我が大日本帝國に於てのみ居心地よく住みなされてゐる、釋尊の説かれた教法は大乗である、自覺々他覺行圓滿の大乗教である、己れ獨りよければ他はどうでもいゝと云ふか如き小乗教ではないのである、我が大和民族

の(大和)と云ふ固有の民族精神にびつたり合致するのが、この大乗教なるが故に、従つて釋尊は故郷印度を捨て、斷然我が國へ歸化したのである。

次に孔子はどうだらふ、支那に生れて、三綱五常の大道を説き、南船北馬庶幾の違なく大衆を教育したけれども、斯の聖人の説かる、大道を踏きて行ふものなく、堯舜禹湯文武周公の御世の如き治世を支那に於て再現することの出来ないはかなさは、孔子の芳躅を忘却した結果だと見るのが妥當であらう、孔子も朽ちたる木は測るべかならず、糞土の膾は塗るべからずとして、支那民族には匙を投げて仕舞つたのだらう。今では確實に日本に歸化して幸福に暮されてゐる、お住居はお茶の水橋の滯りではあるが、三綱五常の道は、已に大和民族によつて踏み行はれてゐた道と符節を合せたるが如くに、しつくりと抱擁して、我が日の本の津々浦々にまで克明な姿相となり常へに表はれてゐる。

次にアラビヤに生れて、罪ある者の罪を一身に引受けて十字架の上に磔れ給ふた基督は、歐米の人心の荒れ狂ふ狀を哀れに思ひ、その民族性を尊重して、舊教、新教と大分し更に三十二派に細分して、これが救済に従事すること一千九百九十七年の長きに亘つてゐるが、未だに理想的な効

果を收めずして、斯の業生の疾患を如何にして治療すべきやに、打ち悩まされ、打ち案ぜられてゐるのである、それにしても、何とかして住居だけは定むることの要ありとして、我が國に、どうやら腰を落ちつけて「神は愛なり」と云ふことを能く智目行足する處の我が臣民を唯一の力と頼みて、これから逆に漸次支那方面から西南方に行脚するらしいのである。

以上の如く世界の三大聖人は、打揃ふて我が國に居を定められた、何と云ふ偉觀だらう、我が國の如き、皇室と臣民との關係が、義は君臣、情は父子——忠孝一本の大精神を如實に實踐する處の臣民、太陽の如き光りと熱と力を仁愛と云ふ名によつて兼ね備へさせられ給ふ我が皇室は緩に應じ急に應じて臣民を慈愛覆育させ給ふことの畏き極みを報謝感激することの幸慶は筆舌の限りでは無い、只々伏して感涙に咽ぶ計りである、斯かることの美しい情景が三大聖人の居を定むることについて決心を唆つたことは當然と云はなければならぬ、然しながら、何もかも知足して缺陷あることを疑はぬだけに、文化のレベルを最高度にまで引上げたことの、我等大日本帝國臣民の自信は、果して正しいものだらうか、日の子、日の女としての信念は尊い限りのものでそうした自覺に基調して行藏することは正しいものでなければならぬ、然しそれは果して正しいこと許りだらうか。

世界の三大聖人が、凡て歸化して暮すだけに、我が國の正義、仁愛、正勇、正智は、我が臣民には悉く具有してゐる、けれどもそれが果して雲霞に遮ぎらるゝことなく眞の姿を克明に照し得ることが出来てゐるか何ふか、吾人がこれを反省し、彼を内省する時に、必ずしも「何等の缺陷なし、何等の危険なし、何等の恐怖なし」と斷ずることの勇氣なきことを憚るのである。

成程「人間は満足なるものに非ず、故に社會も亦完全なるものに非ず」と云ふことの諦觀に自己を措いて考ふるなれば、強ち世界に恥ぢ憚ることは些つとも無い、恐らく世界共通の實相であるから、我が國だけが、争で憚り恥つることの要あらむやと云はれ、ばそれまで、ある、然しながら大日本帝國の名の手前、それを憚らないでいゝのか、三大聖人が住み心地よしとして歸化してゐる淨土境の我國として、それを恥ぢなくていゝのか、更に明治天皇の御製「四方の海皆はらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらむ」と詠ませ給ひし大御心を體して——世界を光被せんとする大理想を有する臣民が「蜻蛉や飛び直しても元の枝」と云ふが如き卑屈停滯に安んじていゝのか。痛狂は醉はざるを笑ひ、醜醉は覺者を嘲けると云ふ、これは下根下智の爲す處である、上

横上智の我が大和民族は、必ずや省みて自己の缺陷を補正することに、自己の誤謬を正すことに、淺見偏見を改むることに決して吝でないことを深く信ずるが故に、以下述ぶる處のものを大に是正すべく、大和民族の名に於て能く考へて貰いたいのである。

一、物一々の尊貴性を味ふべし

宇宙に存在する物、個々に異なつた使命を有するのである、それは釋尊が「天上天下唯我獨尊」と云つた如くに、操行は星の如く意趣は面に似てゐる如く、人間として考へて見ても、世界中に生存生活してゐる人間が約二十億とすると、その一々の人間は、自己に代り得べき同一の或は相等しいものは一人もないのであつて、自己は唯一無二のものでなければならぬ、唯一無二のもの程宇宙に於て尊いものがあるか、故に自己は他に代替者がないから自分は尊いのだと釋尊は云はれたので、決して自惚れから云つた言葉でないことは明かである、けれどもそれは釋尊許りでない、又人間許りでない、宇宙に存在する所のもの悉くが尊いのである、如何なるものと雖も相違はぬ同じきもの、相等しきものと云ふものは宇宙間に於ては無い、濱の眞砂の一々に就て見て

も、樹の葉一枚々々に就て見ても、雀の一羽々々に就て見ても、蟻一匹々々に就て見ても、貨幣の一々に就て見ても、凡ての點に於て相同じ相等しいと云ふものは一つもない、たゞ相対しく相同じく相似てゐるに過ぎないのである而して森羅萬象の事々物々は相同じく相等しきものは無いとしても、これ等のものは凡て相互的に相即不離の關係に於て相結ばれてゐて、無關係で無聯絡であると云ふものも亦一つとして無いのである。

「能くもの、道理を考へる」と云ふ言葉があるが、それは恐らく斯の事々物々の關係を表現する端的の言葉であらうと思ふのである、左に例を擧げて斯の關係を説いて見やう。

一、連帶相關の例一

一、土佐の宿毛と云ふ寒村に起つた問題であるが、河川の水は細つて、から風はね釣瓶をゆする臘月の頃、月は利録の如くに牙へて哲人の腦裡を痛く刺激し、霜雪は地相を改めて詩人の腸を刺り斐元は暫時餘韻を収めて、迎ふる春の準備にいそしむる寒天を擇んで、趨向本能の指令に依つて、毎年遠く樺太方面から斯の宿毛の寒村へ轉の群が訪れることになつてゐた、宿毛の村端れ

には田を養ふ池沼が處々に點在して其處こゝに鴨の群れは翼を休めてグー／＼と樂のしさうに啼き合ふてゐた、農民は鴨の訪れを待つてゐましたと計り、鐵砲で射殺し村中寄り合つて是を料理し饌を薦め盃を飛ばすことを無上の楽しみとしてゐた、然しながら斯の楽しみを決して楽しみとしないで、何とかして、之を廢止せしむることもがなと頭痛に病んでゐた人があつた、それは無益の殺生はするものではない、一殺多生の理由なら殺生も強ち無益でないのみならず、寧ろそれが佛道にかなふものなりと教へる名僧知識かそれであつた。

或日のこと村の重立ちたる者を寺に集めて、殺生に何の利益があるか、その肉を食ふ爲であるならば、それは人間として生命の感に乏しいもので、鴨に對しても恥づべきである、弱きものを殺戮し得る爲に鐵砲は發明されたのでない、破邪顯正の爲め、惡魔降伏の爲めに活用せらるべきである。態々神太方面がら住心地よき、斯の宿毛の地を擇んで、楽しく暮す鴨の集團を殺生してその肉を喰ふとは、何たる非文明的惡業であらう、それでも、これを殺さなければ、村人の楽しみが奪はるゝと云ふならば、これを生かし得る楽しみに代へたらどうであらう、何事でも他から奪ふことはよろしくない、反對に他に與ふことは善事である、奪ふことよりも與へることにし

「たら何うか」と諍々と論された村人は、「成程惡るかつた、村人の全體に和尚の趣旨を觸れて一體に今年からふつゝりと廢止します」と盟つた。

名僧知識の言葉は千鈞の重さがあつた、盟つた村人は一人として時に鐵砲を放すが如き不心得はしなかつた、従つて其の冬訪れた鴨の集團は、點在するどの池沼にも嬉々として羽敲きしながら、濁音の啼聲にとよめきながら、斯の名僧知識の徳を讃嘆した様であつた。

處が其の翌年の夏の頃から秋にかけて、宿毛の村の稻には大變なウンカがついて思ふ様に米が取れなかつた、名僧知識は大般若經を燈がせて田の畦を廻らせたが、何の効果もなく、小首を傾けて考へだした、村民は石灰やら何やらでこれが驅除に精一杯の努力を傾けたが些の利き目もなかつたので腕を拱いて考へた、けれども兩者の考へは休むに似た程のもので、考へから更に考へを止揚することが出来なかつた、そこで縣廳からそれに關する知識を有つた技師の派遣を乞ふた、技師は種々そこに至るまでの原因を調査した處、結局それは鴨を射殺することを廢止した名僧知識の無智に歸せなければならぬことになつた。

鴨が池沼に羽翼を休め餌を探し、池沼の滑りに遊んでゐる蜻蛉の幼虫を一つ残らず啄み盡され

晩夏から中秋にかけて稻穂の空らには一匹の蜻蛉の空中飛行をも認めなかつたのである。必然的に蜻蛉に食はるべきウシカが食はれないで蕃殖に蕃殖を續けて、終に稻作を亡ぼし盡したことが分つた。何と興味ある關係實相ではないか。而して宿毛に米が取れなかつたから、それが又經濟的方面、文化的施爲に異常な影響をしたことも亦必然であつた。之を見ても事々物々の關係、連絡と云ふものを事實に即して考へて見ると能く理解出来るのである。

一、實例の二

ロ、昨年夏の夏の頃と思ふ、箱根から、小田原一帯にかけて、野鼠の爲に樹木は云ふに及ばず田畑のものが凡て荒し盡され、見渡す限り約五十萬丁の山野は眼に寸碧を認めないまでに荒涼蕭條たるものと化せられた、各村は必死の防禦に努め、懸命に野鼠驅除に努めたが、燎原の火の如く勢威倍々甚しくなつて、其の及ぶ處際限を知るに由なきまでの危殆に襲はれた、無智者の爲すこととは、それ自體が平凡で、平凡の中にも眞理ありと云はるゝことは、千の石の中にも偶々一つ位の玉が混在してゐると云ふ、偶然の發見を意味することであらうが、平凡の中の凡てのものに眞

理ありと云ふ意味ではない、故に無智な村民が爲す處の努力は、野鼠の禍を排除するには決して正鵠を得てゐなかつた。

矢張り病氣は醫者に見せるに限る、野鼠の驅除は農會の技師に頼むに如かずだ、この技師の調査の發表によれば、野鼠の斯く山野の植物を枯死せしめた原因は時代の思想問題と國民の保健問題とに根柢をおいてゐると爲した、けれども勸の悪い、物の道理に暗い村民には开んな抽象的な大難把な説明では得心するものは一人もゐなかつた。矢張り何が爲めに、そう云ふことに歸着するかを詳細に述べなければ理解が出来ない者計りであつたから、免倒でも一應其の原因と結果とを唱んで含める様に、説明の親切さを省略することが出来なかつた。

何故に原因が思想問題にあるか？ わか國民には、未だに歐米の翻譯思想に弄ばれて固有の日本精神を忘れてゐるものもある、我が民族特有の高尙な藝術を無視してダンスに夢中に爲つてゐるものがある、斷髪して君とか僕とかの男性名詞を使つてゐるものがある、愛兒に自分の稱呼マ、とかバ、とか唱へさせてゐるものがある、労働者の無智を煽動して、己が勢力を張るの手段に供し更に甚しきはコミンテルンのお先棒と爲つて、己が存在を忘れ、己が先祖を忘れ、永い過去よ

り遠い未來に亘つて傳へ來り、傳へなければならぬ使命と、我が皇室に對し率り、報恩謝徳しなければならぬ大義を忘れて、露西亞を呼ぶに我が祖國と云ふものがある、これ等思想は實に浮薄輕佻な行爲となつて社會を毒するの甚しきは云はずもがな、更にそうした思想は家庭を破壊し、醇風美俗を滅却して、上下相剋、階級鬭争、終には下剋上とまで亂れて、順序を誤まり、秩序を素すに至つたのである、斯かる思想に於ては物の價値は認められず、或は藝術も宗教も認められず、只實利、實用以外には何ものをも知識の對象に置かざる偏見に捉はれてゐるのであつた。故に櫻の花が咲くのは自然である、種族保存の爲であつて、決して人の眼を喜ばさすのでもなく、その花の色麗はしく、香りの豊かなるは、昆虫を誘致するが爲に外ならぬと云ふ、人が食物を攝るのは己體保存の爲め、子供を生むのは種族維持の爲であつて、母性愛とか、父性愛とかは子を生むる上に必要な條件であつて殊更徳として稱するに當らないと云ふ。

斯の如き實利實用を追求する思想が野鼠をはびこらせる一つの原因と爲つた、と云ふのは斯の思想を以て、この邊り一帶に亘つて、多年自然界に於て動物生活の均勢を保持してゐたものを急に破壊せしめたからである、世界が機會均等を以て平和が保たれるならば、或は領土權益の壟斷

に依つて戰爭招來の原因と爲すならば、斯の思想を以て動物界の均勢を破ることは譬て、其處に異常な勢力の一方的進出を豫想するに難く無い、即ち寒さを禦ぐ爲と、虚榮を満足する爲との犠牲に供されたものに狸と狐との皮革が擇ばれた、この邊りに棲息する狐狸は樺太、北海道のそれよりも稍々價値劣るとも婦人の虚榮を満足せしめ、襟足の白粉といふ、對照の毛色は東京の街路にステツプする婦人の寒さを防ぐには充分であつた。そこで理に敏き商人は農民を誘ふてそれ等狐狸を片端しから狩り盡して仕舞つた、常に狐狸の餌食と爲つて小さくなつてゐた野鼠か、此の際と計り急に威張り何の不安も何の危険もなく蕃殖に蕃殖を續け、數の増加は食の増加を餘儀なくせしめ、終に草木菜果を舐め盡して仕舞つたのである。

又、今一つ數へられた原因は保健の問題である、社會の生活が段々複雑に化すに従ひ人間の神經系統や、血管系統や、細胞系統を刺激することが強烈になり、過度の疲勞を來し終に機能を脆弱ならしめて外氣に對する抵抗力は漸次滅殺され、自然自衛の必要上衣食住と云ふ問題が、高調される様になつたのである。近時文化生活をはき違へた人は往々國民保健の上に現れ來て寒さに堪へられない様になつた。

故に都會に於て生活する處のものは、田舎の何れの設備又は何れの施設よりも、完備され、合理化され、學理化されてゐるに拘はらず、田舎に於て育ちたる者と對照する時に、健否の實質に霄壤の差あることが看取さるのである。こは壯丁の検査に於て發表された統計表を見るにつけても都會生活者は決して晏如たり得ないのであると云ふ説明に盡きた。

以上の例に依て事々無碍の理法が理解され、森羅萬象悉く相即不離の關係に在ることを知るに足る、更に事々物々一々が空間を占有して、一々の體が異なり、相が異なり、用が異なつてゐると云ふ事實に即して考へて見ても、それには一々のものが天與の使命と云ふか或は本務と云ふかそよした意味のものを具有し、それを完全にして有意に遂行する爲には、異常なる努力と鍛錬とを要することが能く了解出来ると思ふのである、然し、事々物々の一々には使命本務の存することとは、宇宙間に於て、何一つとして無用無意義のものゝないことによつて證明せらるゝのみならず、更にそれ等の一々は因と縁と果とによつて連帶相關である、偶然と孤獨に依つて決して存在するもので無いと云ふことを充分に信じて置かなければならない。

一、相互禮拜すべし

宇宙間に存在する凡てのものが相互間に無關係のものは一として無しとの高層觀念は深く腦裡に徹底した、こうした觀念は、それだけの觀念で停止するものではない、それを止揚的契機として、更に更に他を追求して觀念層を深めて行くに相違ない、如何なる人種に於ても世界に文化を誇る人種であるならば、开ふした觀念經過によつて文化を贏ち得ることに成功してゐるからである。

故に吾人が事々無碍にして相即不離なる理法を感得し得るも、それだけで満足すべきものではない、その事々物々一々のものが如何なることによつて存在し得るか、「それは偶然と云ふ不思議の幕の間から出現したものである」と云つて見た處で、今から七十年前の啓蒙時代であるならば一應は首肯して呉れたかも知れなかつた、けれども、今日の文化教育を受けた者の前に、そんなおとぎ斬しでは誰れ一人として納得するものはない、一の検討に相當な時間と勢力と知識と費用とを要しても、それを究明することによつて、享有する社會の幸福を思ふ時、云ひ知れぬ歡喜

に浸り得ることが出来るると云ふ學者の研究に待ち、信じ得べきものを取り、然らざるものは捨つるの断を有し、凡て首肯的なものでなければ、吾人の知性は満足し得ないのである、故に専ら事々物々の相互關係と云ふことより更に演繹して、そのものゝ一々が如何にして成立したかを理論的に追求することは當然の推理過程と見なければならぬ、又物一々は偶然といふものなく必然に依つて成立してゐるものであると云ふことを明白にすることは、物一々の相互關係から更に物一々の相互禮拜にまで漕ぎつけるに、尤も重要な役目でなければならぬからである。

吾人及吾人の周圍を圍繞する空間につき考へて見る、空間には動植物、五行、空氣、太陽系、月、雲霧等充滿してゐる、而して、斯の充滿せる空間は、その一々の關係か、相互的に利益を供給し、相互的に利益を享有すると云ふ共接共益の關係に於て實在する、若し現に空間に包藏さるゝものから、何かを取り去るならば、吾人は生存生活し得ないと云ふことを知らねばならぬ、空氣を無くすればどうだらうか。太陽が光りと熱とを供給して呉れなくなつたらどうだらう、互ひに引力を以て繋ぎ合つてゐる星の世界が無くなつたらどうだらう、河海が無くなつたらどうだらう、樹が無かつたらどうだらう、土が無くなつたらどうだらう、金が無くなつたらどうだらう。

う、更にそうした基準的で單位的な實在が無くなることを豫想しての悲哀のみを考ふることなしに、現實に浸りつゝある文化現象に、吾人の生活を關係せしめて考へる場合、矢張同一の悲哀を味はねばならぬことが了解出来るのである。

吾人の生活に於て——先物質的生活としての衣食住に就て考へて見る、一粒の米でも、一葉菜でも、これは農民の粒々辛苦の汗によつて成るもので、それが市場に運ばれるには交通機關が用ひられる、それを運轉する人々の勞力を要する、市場ではこれを區別して適材を適處に處理する知的勞力者を要する、これを買ひ取る小賣商人、この商人によつて漸く吾人の裏所まで運ばれて来る、運ばれて来るならば代價を仕拂ふ、その仕拂ふ金は大阪の造幣局か或は瀧の川の印刷局かで多數の知識と熟練との集積果によつて出来上りたるものを法制下に統一して吾人に使用の權を附與せられたものである。何と一粒の米でも一枚の葉菜でも、吾人の口に入るまでにはそれだけの、多衆の人々の知識と力と、それから時間と費用と距離とか注ぎ込まれてゐることを知らねばならぬ。

吾人は大和民族として太陽の恩惠の大なることを知つて、これに禮拜することを怠らないこと

を信ずる、たとへ恩恵が太陽よりも少ないとは云へ吾人の團體維持に直接し、種族維持に間接する處の、而も多數の人々の總意總力の籠れる食事に対しても、その恩恵に禮拜を怠つてはならないではないか、けれども科學者は云ふであらう「需給と云ふ經濟的關係に何が爲に禮拜するのか」と然しながら吾人は恧ふした科學者の態度に満足が出来てであらうか。それから衣ると云ふことについても食事と同様に考へられるし、又住むと云ふことについても同じ様に考へられるのであるから、吾人は斯かる大衆の方々に對して、心からなる感謝の意を常に捧げねばならぬと思ふのである、そうした自然に對し、大衆に對しての禮拜は吾人が文化人として最先的に爲さねばならぬ事柄であることは、何等のこれを否定すべき何ものもないことを斷言する。

けれども恧ふした現實の現世利益だけを考ふべきではない、人間が現在するに至るまでには遠き過去を孕み、更に永劫の未來を繋いでいることを忘れてはならない。

己れを生んで呉れたのは父母、その父母を生んで呉れたのは祖父母……ぐんぐん遡ると五十二萬三千年の過去に及ぶ——更にぐんぐん遡るとアメーバに及ぶ、——更にぐんぐん遡ると太陽系に及ぶ、吾人は吾人の人間として時代期だけでは無しに、アメーバにも、更に太陽にまでも、吾

人はその恩恵に對して心からなる報本反始の禮を捧げなければ全的満足は得られないのである。

吾人々類が祖先を崇拜することの恩惠的基調は「天上天下唯我獨尊」の他を以て替はることの出来ない自己の尊貴性を哲學するからである、我が大和民族が祖先を崇拜することを嗤笑する歐米人は何が故に父母に對して柔順であるか、公等も結局父母に對する柔順性を祖先に移し得ることの潜在的希求のあることを認識してゐるに違ひないのだが、機會に植遇しないだけであらうと思ふのである。

斯くの如き祖先を崇拜することは「本立つて道と爲る」誠理表現に外ならないので、それが區別されてゐる人種の各々に於て、或は文野の等差的延長に於て、多少の明暗濃淡があつても恐らく人種凡てに於て共通する處の心理だと思ふのである。神を敬すると云ふ、佛を尊ふと云ふ、人を愛すると云ふ、自他の恩恵に感謝すると云ふ、こうした人間としての高層的な感情は世界に分布されてゐる人種凡てが有つ處のものでなければならぬ、我が大和民族が克明に行藏する處の祖先崇拜の報謝を、如何なるが故にこれを迷信なりと嘲り、偶像崇拜なりと笑ふ歐米人の心理が分らない。

けれどもそれはそれでいゝ、歐米人中、斯の至理が分らなければ、分る様に教養すべき任務が吾人大和民族の上に負荷されてゐると思へばいゝのだ。

吾人は衆生の恩も知り、自然の恩も分り、父母の恩も分り、分る許りでなく、是等のありがたいことも知り、知る許りではない、これを如實に實踐して、誤まることなく一路門なき大道を進んでゐるのである、けれどもまだこれだけの恩義を知自行足するだけでは大和民族としての生存生活を考へることは出来ないのである。それはたゞ部分としての、或は細胞としての、生活が有用化されてゐると云ふに止まるものであつて、部分として或は細胞として本務に或は使命に向つて進み行くと同時に、大和民族團體として活動し得る偉大な力が顯現されなければならぬことを考へられるのである。それは殆んど言説を超越した絶対不動の大信仰とでも云ふべきものであつて、我が大和民族が、これを克明に意識するとせざるとに拘はらず、齊しくその大なる力に歸命しての行藏が爲されてゐることを讃仰しなければならぬものがある。

誠に畏れ多い限りであるけれども、我が皇室の御洪恩に對し奉りては、山の高さも、海の深さも

もこれに比すべくもない、時間の長さも空間の廣さもこれに較ぶべくもない、無始無終に絶対無限の大仁愛を以て、吾等臣民を推育し給はれる無邊の御洪恩に奉謝して、萬徳圓滿の御神格を欽仰し奉りて、臣民が擧げて御皇室に球心的に相集まりて、一糸の亂るゝことなく、一片の丹心を失ふことなく、拜謝感激の生存生活を營んでゐると云ふことでなければならぬ。而して斯の如き世界に冠絶せる我が御皇室の御洪徳を中外に施すことが我等臣民の本務なることを、能く常に認識して、それを生活の上に、動作の上、更に行爲の上に如實に具現して、自分を淨くすると同時に他をも淨くすることに邁進しなければならないのである。「賢者の説教は時を待ち人を待つ」と云ふ、吾等愚は、決して賢者ぶつて時を待つたり、人を待つたりすることはいらぬ、日々これ好日と云ふ心構へで、来る日もく自ら額に汗して、己が與へられてゐる職業を通じて斯の本務斯の使命に努力精進しなければならぬのである。

以上吾人は太陽と大和民族の關係を知り、或は世界の三大聖人の住處を知り、或は物一々の尊貴性を味ひ、或は相互禮拜を爲すべき理由を知つた、それなれば更にその知り得た明を以て、自己日常の生活を一步く眞善美化して行かなければならぬと云ふ倫理觀念が物質に觸着する様に

なることは當然の事と云はなければならぬ、殊に大和民族として、將來の世界を背負つて立たなければならぬ、大本務、大使命を痛感する現實に立つて、生活實相と精神現象とがびつたりと相即しなければ、恐らく世界淨化の大使命など電影泡沫に過ぎないことに爲る、精神に於て認識することであるべきそれが、眞であり、善であり、美であることと云ふことであるならば、これに勢力を吝まないで履踐し、實行して行くと云ふことによつてのみ、大和民族としての將來性が窺はれるのである。然らば如何なることを實踐したらいいのか、實踐と云ふことの本質をどこに置いたならいいのか、又如何なるのに對して、如何なることを實踐するのか。

一、只物資の暴殄を慎むべし

吾人が日常生活に於て、倫理道德が中樞作用となつて、はたらいてゐるなれば、富國強兵も國威宣揚も今一段の光彩を放つことであらうことを信ずる、又それが單なる經濟的に利益方面だけから考へても、利用厚生の實が擧がるのみならず、隨つて勤儉自ら成つて質實剛健の氣象が期せずして作興せらるゝであらうことを信ずる、然しながら吾人が日常生活の上に倫理道德を加へて

あないと云ふことは恐らくあり得ないのであるけれども、それはそれを加へてゐると云ふよりも加へてゐるが如く見ゆるに過ぎないのである、その如くに見ゆるものを眞個に加へなければならぬと云ふことを、云はることが不本意であるなれば、自己が日常爲す處の物の取扱ひ方について、ほんとに實物自體の有する使命を遺憾なく果たさしめてゐるか何ふかを先に反省しなければならぬ、梅尾の明恵上人が「物はあるべきようにあらしめよ」と北條泰時を誡められた、その言葉が泰時だけではなしに、吾人の生活實相を今も誡められてゐる様に感じられてならない、物一々の使命を果たさしむることが、人間が人間の精神を以て、物を支配する時に不動の鐵則としてそれを遵守しなければならぬことだと思ふ、けれども吾人は果して、そうした實踐道德を物資の上に注いでいるか否かを以下述べる處のものについて一應検討して見るがい。

イ、米の取扱ひについて……

米の半搗きは保健上いゝ、滋養價が多くていゝ、又經濟上にもいゝ、と云ふならば何故これを實行しないのか、これを實行してゐるものが果して幾千あるか、實行に統制が必要とあらば、何故その統制機關を作るに懈怠するのか、此點國民は考へなければならぬ。

又米と云ふのは我か大和民族が過去より現在に育てられ、更に未來に育てられなければならぬ
 奪い歴史的食物であるだけではなしに、食物中の主食として我が臣民が永劫に精神と肉體とを
 育て、貰ふ無價の眞寶と言つてもいい位だ。

豊葦原の瑞穂の國に育つ臣民の熱も力も光りも實はこの米から出て來てゐるのだ、然るにその
 米の取扱ひに間然する處がないか何うか、あの汽車中の辨當について考へて見る、三十五錢を
 投じて求めたのはいいが、それを半分位或は酷いになると三分の一位喰べて、腰掛けの下へ
 投げ込んで足蹴にして仕舞ふ、皆が皆そうではないが、斯んな取扱ひをする者も相當數ある。
 斯の爲態を聞人が算盤を弾いて計數に上ぼして見ると、驚くなかれ、汽車中に捨てる米を以て
 便に我が國內に於て消費する酒を醸造し得ると云ふ結論を得たのである。

單に酒を造り得ると云ふことのみに止まらず、斯の遺棄さるる辨當が、已れの口にまで到達す
 る過程を考へ、その恩惠を考へることが今日、臣民に於て考へなければならぬ必須課題ではな
 いか。

ロ、紙の取扱ひについて……

紙は神に通じ、上に通じ美に通じて、我が大和民族として有つ紙に関する觀念は、歐米のそれ
 の如く雜把に觀念することが出来ない程、盡深微妙な意義が内在してゐるのである、随つて一
 枚の紙を取扱ふことについても、非常な關心を以て町重にその紙としての使命を存分に果たさ
 しむべく努力しなければ先祖に對して相濟まないのである。

處が機械工業が盛大に爲つて、大量生産を無雜作に爲す様に爲つてからは、紙の取扱ひが極め
 て散漫であることを認めなければならぬのである、紙は清淨なものとして、昔時は冠婚、葬
 祭等の場合には、乾度懷紙と云つて、一種の禮儀の心持を以て白紙を四つ折にして懷中に忍ば
 せたものである。

或は古今を通じて、神佛に物を供へる時に紙を下敷にする、或はお腹にこれを用ひる、注目細
 に用ひる、殆んど凡ての禮式には必ず紙の用ひられざるはなしと云つてもいい、位に紙は時間と
 空間とに、大なる用を便じてゐる。

殊に最近斯の紙なくしては、一日として人間は生活し得ないと云ふ、文化的條件を偉大に保
 有してゐることを知らねばならぬ、新聞雜誌、ビラ廣告、パンフレットにリフレット等吾人の

思想を發表し、或は社會の出來事を報道し、或は宗教、哲學、文學を以て社會を教育する等、凡そ吾人の文化人として生活を爲す上に於て、精神に滋養を與へらるゝものゝ中、斯の紙が爲すこと程、大切にして而も日常吾人の眼に觸着せしめなければ、承知出來ないまでに必須的條件は、恐らく他に見當らないと思ふのである。更に又斯の紙の有つ尤も大なる尊貴性を窺ふならば、任免黜陟の辭令、紙幣、郵便の用など何うだらう、吾人が社會的動物として存在する以上、斯の紙の尊貴性を冒瀆することは出來難いことだと思ふのである、然るに吾人は省みて、斯の紙の凡てに就て、取扱上恥ぢ得る處なきやを疑ふのである。

就中最も恥とする處は紙價を申上げて文化生活に脅威を與へる所作である、原料高く労働高く諸物價高くして經營困難と云ふならば是非ないことであるが、そうした理由なしに、或は部分的な跋扈的な不利益な條件を盾にして、寧ろ綜合的に見ては利益ある場合に於ても、經營困難なりとの理由の下に、紙價を高めて、文化の進展性に大傷害を與ふる様なことがあつてはならぬのである、若し斯の如きことがありとせば、それは臣民として傳統された徳義に叛く許りでないに、大衆的大和民族として大恥辱を感ぜねばならぬのである。

それから吾人は常に、紙の使命を充分に果たさする爲に、吾人の努力が充分にそれに注がれてゐるが何うかを強く反省して見るがいゝ。

最近出征兵士の見送りに使用する紙製の日丸旗の取扱ひは如何にぞや、出征兵士の首途を盛んにするが故に「思勇無双の我が兵は」と高唱しながら打振つたその旗を足蹴にして省みないものがある、譬に於て、道路に於て、けれども無意識に爲すことについては責任なしと云ふ法理思想を以て、斯の爲態を寛大に默視し得らるゝであらうか、我が國旗を、自ら粗末にすると云ふことは、我が國旗の尊さを知らざるか故なりこれ等のものは臣民としての存在價値なしと云ふも敢て過言ではあるまい。

斯の如く國旗を粗末にする位であるから、吾人の日常生活に於て紙を粗末にすることは推して知るべしである、デパートの包紙、新聞紙の始末、それは學校の生徒が旅行先で辨當を食した後、の素亂さを見れば、その學生の家庭の状を知ることが出來ると思ふ。

吾人は何とかして紙の有つ處の使命を徹底的に果たさしめては如何にぞや。

ハ、水の取扱ひについて……

吾人の生活に水無しでは一日として過ごす譯にはゆかないのである、それだけ水と云ふものが生活に必須缺くべからざるものならば、何が故にこれを粗漏に取扱つて、敢て憚りとせざるにや。

甲乙丙丁、をしなべて水を粗末にすることは一律に开うであると云つてもいい。

貴賤貧富の區別なく、考幼男女の差別なく粗末にすると云ふことについては、何だかそふした弊風が傳統されてゐるかの様で、面恥かしい限りである。

これは我が大和民族が潔癖と云ふことにも理由付けて考へらるゝことであつて、強ち弊風として貶す譯にもゆかない筋合もあるにはあるが。

例へば如何なる場合と雖も、何はさて置いても毎晩入浴しなければ、何だか忘れものをした様に、氣持ちが悪くて堪へられないと云ふこと。

或は神佛禮拜に於ける場合の事前行爲として口を漱き、手を淨める爲に用ひる水、家屋を清淨にするが爲に、庭園をすが／＼しくするが爲に用ひる水。

などは如何にしてもこれを節約することの出来ない民族的な高尚な風習である。然しながらこゝ

れ等の風習までも節約して水の濫費に協力せよと云ふのではない、その風習の實行の場合に於ても必要以上に濫費することは無論慎むがい。例へば入浴して、上り湯を十杯も十五杯も頭から掛けることは何うか、それは一杯か二杯で充分でないか、顔を洗ふにしても洗面器一杯で充分であるにも拘はらず、三杯四杯も濫費して當然と云つた顔をしてゐる者がある、一つの茶碗を洗ふにしても、菜葉一株洗ふにしても、水道の栓から出し放しにして減茶に、いつまでも洗ふてゐる者がある、この出し放しと云ふことが、尤もいけない慣習であるから、これを廢止するには各公園に於ける噴水及便所、飲み水の出し放しを廢止しなくてはならぬ、公衆を教育するには大きな矛盾を努めて引込めなくては効果を期することは困難である。

然しながら節約と云ふことは濫費を慎めと云ふことであつて必要を節約せよと云ふことではない、不必要に使用すべきものを必要の範圍に止めよと云ふ意に外ならぬ。

洗濯するにしても、米を洗ふにしても、極端に民族性としての潔癖を發揮することを慎めと云ふことである。

現在支那の天地に於て社稷の爲に、血河屍山の中に破邪顯正の劍を揮つてゐる我等同胞の上に

心を馳せて考へよ、百年河清を待つも河清くない、黄河の濁りの水で、口腹を充たす困苦、ゴビの沙漠に利録の様な月が冴へて、北支の連山は薄曇を流した様に眠る頃、我が勇士の水筒の水は枯れて一滴も無い缺乏。

これを考へて水を濫費することを慎しまなくてはならぬ。

水は吾人の身體の六割を占め、水無ければ死を招くと云ふ、貴重なる地位にある水を濫りに費消することは、轉て己が身を削りながら人生を消極に導いて行くものではなからうか。東京市が團起と爲つて村山から山口へ、山口が更に奥多摩へと貯水池を建設することは、人口の膨脹に伴ふ必然の設備として、決して文句を云ふべき何ものも無いけれども、斯うした設備が出来るから幾干でも濫費していゝといふ理由にはならないと考へるのである。

のみならず、斯うした設備を通じて、循環の法則に随つて水は、吾人の體中を常に新陳代謝してゐるから濫費してもいゝと云ふ悪質思想は、どうしても共同の力で排除せねばならぬこと、考へらるるのである。

二、衣類と食物との取扱ひについて……

先第一に衣類の取扱ひについて考へて見る、衣類は、人類の文化が向上發展することに反比例して人間の身體が次第々々に退歩することに、其の必要性の基調があることに、法意せねばならない。

文化は單純を複雑にする素質を持つてゐるから、人類生活が段々と未開から文化へ、野蠻から文明へと進むに伴ふて、智性の働らき情意の働きから、種々な生活事情に適應する様な、發明やら、發見やらが、爲されて以來は、吾人々類は、漸次に自然の懷から隔るゝ様になつた。随つて直接自然の中で生活し得る様に出來てゐた身體は、文化の牆壁に隔てられて、自然から距離を置いて人爲的な生活を營む様になつた。

無論自然から離れての人間生活は考へられない、たゞ人間が身に一物を纏はなくても太陽の熱によつて、風雨の恵によつて、生活し得たものが、斯うした自然的な生活が段々出來なくなつて、謂はゞ文化に禍まれて身體が脆弱になつて、自然界の刺激に抵抗が出來なくなつて、身には衣服と云ふものを纏はなくては生活が出來なくなつた現在、省みて如何にも身體の退化速くなるに驚かざるを得ないのである。

身體の退歩が必然的に衣類と云ふものを發明して生活に即應した、外界に對する身體の抵抗を衣類を以て代はらしめたもので、それなら寒暑を防ぐに足るべきもので満足したら、よさそうなものだか、人間の欲望と云ふものは、人間を駆つてこの衣類を「禮儀」と云ふものに結び付けて贅澤心と云ふものを生助長するに至つた。

贅澤は内には平氏が亡び、鎌倉が亡び、徳川が亡んだ歴史がある、外には羅馬が亡び、バビロンが亡び、支那の秦漢が亡滅した記録が残つてゐるから、贅澤は虎狼よりも恐ろしいものであることは能く分る、分るには分るが、分りながらの贅澤を取てするのが人間の常である。けれども絶大なる將來性を有つ處の我が大和民族は省みて斯の贅澤を芟除する爲に現實の生活を改善せねばならぬ大事業が負荷されてゐることを認識する必要がある、然しながら生活改善と云ふことは、人生に於ける趣味を奪ひ、美を奪ひて枯野原に立つて落葉を敷へよと云ふ意味ではない、矢張りデパートの繁榮もよからう、貴金屬商の隆昌もよからう。

だが概念的に云ふ言葉で程度が分らないけれども「程々に」と云ふことを生活實相の上に考へぬ様なものは、必ずや贅澤と云ふことを平氣でやつてゐる者である。

贅澤は人間の社會的地位に不相應な生活を意味するのであつて、斯の贅澤を排除することによつて、受くる社會の康寧、國家の利益は實に偉大なるものと云はなければならぬ。殊に衣服に關しての改善が實らす功は將來の大日本帝國の活動油としての役目を受持つに相應はしいものでなければならぬ、例へば禮式に用ふる服装は、現在の様に紋服に、モーニングに、縫紋服に、と云つた様なものは、紋服なら紋服、モーニングならモーニングと一つにして仕舞ふことである、無論各人に於て、常に洋服を好む者は、モーニング、私服を常にするものは紋服と云ふ風に改むることであつて、各人がモーニングも用ひ、紋服も用ひると云ふ無駄と贅澤を省かなくてはならぬ。

人各々其の職業によつて、社會的交渉も異なるものがあるから總體的に一樣一律な式服にすることは困難であるかも知れぬ、要は日本座敷でも、洋式の椅子席でも、どちらでもいい、男女を問はず自分で決めた一樣の式服で行くことにすればいいのだ、开うして二以上の無駄と贅澤とを省くことによつて、改善された家庭、社會は、更に他の重要にして新たな文化の光明を擲んで取り入れることが出来るであらう。

式服の異なるに随つて履物も違ふ、靴、フェルトの草履、足駄、女ならば理髪を改めなければならぬ、その無駄と手数と費用とを節約して有用な方面へ注ぐこと、思想が未だ寝てゐて起きそうもない、覺悟の迅速は機根に不同があるからだと言ふ、けれども鶏鳴は曉を告げてゐる、いつまでも寝てゐる時ではない、米國や、英國に起こされなくても、自分自身で起き立たなくてはならぬ、無駄を省き贅澤を慎み、而して節約されたものを必要に注入することは、大和民族凡てが覺醒興起することによつてのみ實行されることである、敢て他を云ふ必要はない、次は食物について考へて見たい。

所謂臺所の改善である、食物を取扱ふことについて、日常どれだけの關心が注がれてゐるかを考へて、改むべきは改め、進んで取り入れるべきものは取り入れ、そうして衛生保健の問題を解決せねばならぬと思ふのである。

今日の様な、實に「成つてゐない」臺所ではいつまで経つても傳染病は蟠居して動くまいし、臣民の健康レベルは段々と降下するであらうし、世界に響はるゝ文明國としての大日本の重大なる瑕疵として歐米の者共に嘲笑さるゝことから脱け出ることには到底六ヶ敷いことだらうと思ふ

のである。

衛生思想の普及徹底は、直ちに保健衛生上に異常の効果を齎すことは過去の歴史に赫々として残つてゐる、例へば埼玉縣下に於ける鞭虫、蟻虫、蛔虫の猖獗に悩まされた縣民は殆んど生氣なく、青瓢箪の如き饒なき顔をして耕耘生産の業にいそしんでゐたが、何等見るべきものなく、労働能率は漸次に低下して産業次第に衰微し、爲に各府縣の體育聯合競技會に於ても埼玉縣は常に劣等の位置に甘んじなければならなかつた、然るに斯の忌はしき事實に覺醒した縣民と當局とは協力一致、百方研究工夫して、衛生思想の普及に努め、保健と云ふことが生産に及ぼし、社會に及ぼし、國家に及ぶ影響の實に重大なることの自覺を促して、一向専念斯の寄生虫驅除に努力を傾盡した結果、今日に於てはその保健相に於て、體育運動に於て、全國的に見て十指の中に算へらるゝに至つてゐるが如き、或は女子の體格の極めて貧弱なるに思到つた數育家は、鼓舞宣傳して互に連絡協調し、大に女子體育に思考を注ぎたる結果、僅々十五年間の間に、女子の平均身長を三寸も上昇した功績の如きは没すべからざる事實として吾人の前に展開されて、吾人を示唆し刺戟してゐるではないか。

随つて斯くの如き生きた実績擧揚の事實に鑑みても、臺所の改善の忽諸に附すべからざるは明かなことでありながら、これを懈怠して敢てなさざるは何としたことであらうか。

無智の行蔵は觸衆の誤謬を醸醸する虞れがあるが、智目行足にはそんな虞れば無い、今日只今から大に勇敢に臺所の改善に努めたらどうか。

菜葉が廉いからと云ふので一度に澤山買溜して三分位使つて七分は埃箱に捨る様なことはどうだらうか。

腐敗變質したものを勿體なしとして、これを食し、ゲルトネル氏菌に犯され、或は大腸カタルや赤痢に罹り、自他の苦惱迷惑などはどんなものだらう。

蚊や蚤の驅除を怠つたが爲に種々な傳染病に侵さるゝことの實相は何としたことか。

瓦斯の使用に、電氣の使用に、經濟的な願慮を拂ふの餘地なきや。

一本の大根を求めて、葉を捨て、莖を捨て、皮をむき、これをヲロシにして汁を絞り營養價の失はれた全くの殘滓を食ひつゝありはしまいか。

物についての營養價を知り、風味の高尙を知り、經濟上の無駄と冗費を知りて、臺所を支配し

處理しつゝある女性が幾人ありや。

物資暴珍の尤も深刻にして強く吾人を打つものは、今日の臺所より甚しきは無しと云ひたい、この改良改善は「臣民保健」と云ふにと、相即不離の關係に在ることを思念して、臣民全體が共同して大なる改革を断行しなければならぬ刻下の急務と信ずる。

一、將來の大日本帝國に資する一條の道

現時は準戰時々代から一轉して戰時々代である、この狀勢がいつまで續くかは豫め逆睹し難い。たとへば日支事變が解決しても、太平洋の波浪の必ずしも平穩なりと斷ずることの出來難い憂患が搖曳してゐる。滿洲國の存在が確固不動のものであつても、黒龍江の流れは必ずしも單調ではあり得ないことを感ずる。

支那の領土に於ける門戶開放と機會均等との事由が歐米と關係を有する限り、或はスペイン問題とアラビア問題とか解決せぬ限り、我は滿腹して幸福に酔ひながら現状維持を叫ぶ國と、空腹の苦痛に悩みながら現状打破を叫ぶ國と、この二つの相剋摩擦が圓滿に打開出來ぬ限り世界の平

和を期待し得るの甚だ絶望なるを思はざるを得ないのである。況んや我が大日本帝國は、世界の平和確立の爲に、先づ手近な東洋平和確立の爲に智目行足の努力を傾けてゐるのであるが、けれども、道をつげんとすれば茅茨を爰除するの苦勞があり苦汗がある。日支事變の姿相が正しくそれである。

吾人臣民は現在の大日本の偉大なる體相を瞻仰して更に更に絶大なる未來の榮光を求め、刻苦勉勵しなければならぬ、眼前の名利や、刹那の享樂に耽溺して永遠の大日本帝國を忘れてはならぬ、絶對無限の靈性に基く神聖なる理想を忘れ、自覺々他覺行圓滿の大乘的精神の高位性を匿くして樹の無い山、水の無い沙漠を歩いてはならない。

宇宙の大道、事々無碍の理法——それは吾人が、盡忠報國によつて、孝悌實踐によつて、四恩の報謝によつてのみ顯現し得ることなるを知るならば、隨つて物資總動員の基調が那邊に存するかは敢て贅を要すまい、一端を叩くことによつて三端は必ずや聲音を發するであらうことを信ずる、物質暴珍の一事が吾が國の將來に如何なる禍業を生せしむるかには深く探るまでもなからふと思ふのである。(終り)

貴い米の知識

體力は半搗米から

▼ 西川米店は無砂搗米の専門店であります
 ▼ 健康は先づ無砂搗米から
 ▼ 飯米を大切にしましやう
 ▼ 一日一世帯一勺を粗末にすれば東京市内丈でも百十九石餘(約二百俵)です

小石川區表町

すぐ配達
 電話御利用

西川米店

電話小石川三四六六

一リラブイラ民國

飯田傳一譯註 山鹿配所殘筆

今泉定助講 國體と人生々活

河野密講 民衆富んで國防全し

鷺尾順敬講 經國の北條時宗

上杉慎吉講 精神動員の根柢

松本忠雄講 日支事變と國民の覺悟

國府犀東講 東京市の恩人 樂翁公を憶ふ

開放せる常設圖書館

萬民日常座右の寶庫

團體申込歓迎

……(送料各各)……

昭和十二年十二月十日 印刷
 昭和十二年十二月十五日 發行
 編輯者 古藤田喜助
 印刷所 塩田熊男
 發行所 日本學術普及會
 東京市小石川區上野町一八
 電話小石川三九九一
 郵便東京三〇八九